

## 子ども劇場に根付く意識と文化 —子ども劇場の「今」—

西 彩花

子ども劇場とは、文化運動を通じて、子どもの健全な成長を図ることを目的に活動を行っている文化団体である。舞台芸術の鑑賞活動（例会活動）と、遊び・体験活動（自主活動）を活動の大きな2つの柱にしている。先行研究では、子ども劇場に関わる母親にとって社会進出の機会になっていることや、地域での社会教育を支援する団体であることが示唆されている。しかし、子ども劇場の活動規模の縮小や、会員数の減少といった、現在の子ども劇場の衰退に着目した研究はあまりなされていない。そこで、本研究では、これまで地域で文化教育運動を続けてきた子ども劇場に焦点を当て、現在の子ども劇場がどのような要素や文化によって形作られているのかを明らかにする。また、それにより、子ども劇場に関わる人々が見出している多様な意義や、子ども劇場がなくなることへの意識を当事者の目線から分析することを目的とする。

本研究では参与観察と半構造化インタビューを研究手法として採用した。調査対象者は、茨城県つくば市にあるつくば子ども劇場の会員とその関係者、および子ども劇場関係者とし、調査期間は2018年3月から2018年10月までとした。対象者は、つくば子ども劇場で参与観察する中で協力者を募るという方法で集め、約半年の参与観察を行い、9人の方にインタビューを行った。

本研究の調査から、以下の2点が明らかになった。1点目は、子ども劇場が(1) 仕組み、(2) 地域、(3) 人という3つの要素に影響を受けながら、存在しているという点である。仕組みの変化や地域との結びつき方、所属する会員の考え方等によって、それぞれの子ども劇場に違いが生まれていることが明らかになった。2点目は、子ども劇場の会員にとって、子ども劇場の意義は多様であるという点である。大人の会員にとって、劇を見ることだけが子ども劇場ではなく、母親という立場を超えて人とのつながりを求める大人会員の姿や、親子の間に生まれる独特な距離、わが子を超えた先に運動としての子ども劇場があることが分かった。また、子どもの会員にとっても、子ども劇場が自らを形成する場になっていることが明らかになった。

これらのことから、会員それぞれが、子ども劇場の活動に関わる中で多種多様な意義を見出していくことが発見された。それゆえに、子ども劇場がなくなることに對しても揺らぎを抱えていると考察される。

本研究によって、子ども劇場の文化や特徴が明らかになるとともに、子ども劇場が、既存の研究で指摘された意義にとどまらず、会員の数に匹敵するほどのバリエーションを持った場として今もなお機能していることが分かった。本研究では、そうした一口には言えない多様な子ども劇場の「今」を記述することができた。

(指導教員 照山絢子)